

飼育下におけるヤマノカミの卵内発生と初期生活史

○増永 拓斗、岡村 峻佑
(マリンワールド海の中道)

ヤマノカミ *Trachidermus fasciatus* は国内では有明海及び周辺の河川にのみ生息する九州固有種であり、海で孵化した仔魚が成長に伴い純淡水域へと遡上し、再び海へ下り産卵する降下回遊魚である。本種の仔稚魚の形態に関する報告は幾つかあるが、いずれも断片的であり、また卵内発生に関する記述は無い。そこで今回は水槽飼育下における卵内発生と初期生活史の解明を目的とした。

親魚は2024年5月10日に佐賀県鹿島市の純淡水域にて採集したもので、水量約240Lのガラス製水槽に収容した。餌料にはオキアミとキビナゴの切り身を週に3回与えた。降下回遊する生態に併せて11月から徐々に塩分濃度を上昇させ、1月には海水馴化を完了し、水温も夏期の23°Cから7°Cまで低下させた。

2025年3月21日に産卵床に用いた塩ビパイプの内側上部に約2,200粒の卵を確認した。50分後には4細胞期まで進行しており、153時間後に胚体原基が、405時間後には眼の黒化を確認した。孵化約1か月後の4月20日、一斉孵化に至った。孵化仔魚は平均全長8.68 mm (n=5) で、卵黄は吸収され口と肛門は開口していた。飼育水槽には30Lパンライトを用いて、水温を10°Cに調整した水量約1.0 m³のFRP製水槽に浮かべてウォーターバス方式とした。餌料は孵化直後から栄養強化したアルテミアのノープリウスを与え、毎日水量の約1/3を換水した。孵化22日後に大多数が着底し、同時に稚魚期に入った。孵化6か月後には平均全長110.68 mm (n=5) となり、113尾を飼育中である。